

## 奄美大島歴史深訪 (2)

— 島民を苦悩させたサトウキビと家人（ヤンチュ）制度，  
そしてケンムン伝説 —

広島文化学園大学看護学部・看護学研究科

佐々木 秀 美

### ■ はじめに

前稿では風光明媚な奄美大島と平家落人伝説あるいは源為朝伝説に関わる神社について報告したが、本稿では、父の残した三味線（図1）と、奄美の民謡（島唄）の一節により、現実味がある奄美大島島民の苦悩を中心にその歴史的背景について調査した結果を報告する。

積極的な祖父とは対照的にきゃしゃで内向的な父は生存中、良く、床の間に座って三味線を弾いていた。それは奄美の民謡であったり、長唄であったりしたが、歌詞は知らなくても聞き覚えのあるものや、ほとんど知らない曲であった。その寂しい音色は今でも心の奥底に眠っている。その三味線は現在、長兄を経由して次兄、そして現在、私の手元にある。数年前、皮の破れを修復するべく奄美市名瀬の三味線専門店に持参した。その折、改めて収納されている箱のふたポケットに当該三味線に関する記載があった（図2）。ここで分かったことは、手元にある三味線は奄美三味線ではなく、琉球三味線であるとのこと。なぜ、琉球の三味線が我が家に？というのが**第一の疑問**である。



図1 筆者所有の三味線

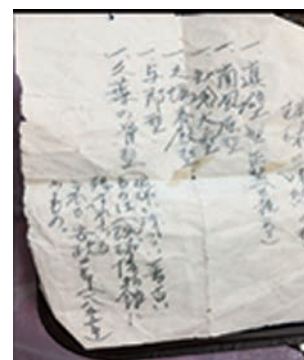


図2 三味線収納箱内部にあった説明書き

せっかく修理した三味線を床の間の飾りにするには惜しく、又、指先の訓練と島唄を謳うことにより呼吸訓練にでもなれば、そして何とか弾けるようになりたいと奄美三味線の弾き手として有名な“奄美民謡武下流”家元武下和平先生（1933-2021）に弟子入りしたが、師匠はあいにく体調を崩し、間もなく逝去した。武下先生は日頃、奄美の民謡に興味を持っている人大歓迎で、しかも一度もうたったことのない、あるいは三味線を弾いたことのない人への指導がより大切との考えがあるとのことだったので、

連絡先：佐々木 秀美

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3

E-mail: hidemi@hbg.ac.jp

勇気を出して入門した。現在は娘の武下かおり先生（1956- ）より指導を受けている。武下先生門下生であった兄和登志（四男）は、優秀な三味線の弾き手であったが、筆者はこれまで聞くだけの人間。コロナ禍であるので、主にオンラインのレッスンである。やってみると本当に難しい！とにかく難しい！奄美の民謡は高音であり、かつ譜面がなく、口頭伝承によるので難しい！ドレミファ感覚では覚えられない。

さらに、ありのままに口頭伝承で歌えるようになれば良いのに、奄美民謡の中で、特に“いとくり節”の一節と“くるだんど節”の一節が筆者の探求心に火をつけた。科学主義の洗礼を受けた筆者もそのままでは済まない嫌な性分が私自身を苦悩させる。真にフローレンス・ナイチンゲール（Florence Nightingale 1820-1910）が自身の著作に引用したオーギュスト・コント（Auguste Comte 1798-1857）の「生活は心を目覚めさせて問いを抱かせ、心は知性を目覚めさせてその問いに答えを要求する。」<sup>1)</sup> そのものの心境である。それは、“いとくり節”にはサトウキビの刈り取りに関する苦渋が、そして、“くるだんど節”の一節には家人（ヤンチュ）の娘の苦痛が表現されていたからである。これらの島唄の内容から奄美大島が一体なぜ、このような苦悩を抱えたのか？これが第二・第三の疑問である。加えて、“くるだんど節”の元唱の一節には生家に近い内容がある。願わくば、島民を苦しめた側でないことを願いつつ、本論では奄美の三味線、島唄を通して、サトウキビ、家人（ヤンチュ）を手掛かりに奄美の歴史の一片を紐解いてみたい。

## ■ 奄美大島の歴史概要と三味線

### 1. 奄美大島の歴史概要

『大奄美史』<sup>2)</sup>によれば、奄美の名称は古事記では阿麻彌（アマミ）、日本書記では海見（アマミ）と表現されているとか、既に『平家落人と源為朝伝説の島ー奄美大島歴史深訪』<sup>3)</sup>でも若干述べたが、それは神話・伝説の世界である。古事記の国造りの様に、女神の阿摩弥姑（アマミコ）と男神の志仁礼久（シニレク）が天から降りて来て、奄美大島を創ったという。順番に島が創られて、琉球もそうした神話の世界で創造された地である。つまり、奄美大島と琉球は連なって創造された島々であったとのことから、生家に琉球三味線があっても不思議ではない。しかし、それでは三味線はいつの頃からあったのか？

奄美・琉球と日本（大和）との交易は貝の道に知られるとおり古くからあったそうだ。琉球や奄美をふくむ南西諸島は美しい珊瑚礁で形成されており、豊かな海産物に恵まれていることから、斧やナイフ、首飾りなどの貝製品が多く用いられていた。その貝や貝製品は貝の道を通して、黒潮に乗って北上し、今から2000年以上前の弥生時代（紀元前10世紀または紀元前4.5世紀頃ー紀元後3世紀中頃まで）の日本本土にもたらされた。これが貝の道である。貝の道のルートは、南西諸島から北上して北部九州から瀬戸内海をぬけて近畿地方にいたる道と、玄界灘（げんかいなだ）を経由して日本海沿岸にいたる道があったそうだ<sup>4)</sup>。この頃は平和な時代であったろうか。

次の時代は平家の落人達の来島である。前稿では主として神社を中心に論述したが、調査を進めてみると、平家落人達は先に報告した平資盛（1161-1185）・平有盛（1164-1185）・平行盛（不詳-1185）だけではなく、実際には平清盛（1118-1181）が弟の平教盛（1128-1185）の次男、平教経（1160-1185）も含まれた（図3）。教経は壇ノ浦の戦いでは平家の猛将の一人とされ、義経の八艘飛びに対し、同じく船から船へと移動し、義経と互角に闘った武人として賞賛される。最後には、自身の鎧を脱ぎ捨て安芸太郎と次郎という源氏側の兄弟を、鎧をつけたまま左右の脇に抱えて締め付け、死出の山の供をせよと言って海に飛び込み、1185年に死亡したことになる。『平家物語』を読むあるいは歴史の教科書などでこの勇敢な若武者について学んだりした男子たちの中には、平家のこの猛将について源義経（1159-1189）同様、憧れたり、ロマンを感じたりしたであろうが、この生存説には夢を壊される感がなきにしもあらずではある。教経の生存説は高知県にもあるようだが、その後、奄美大島にも来島したことになる。『奄美大島物語』によれば、まず、硫黄島に潜伏した資盛は、1202年（建仁2年）に潜伏した硫黄島を脱出、喜界島に辿り着いた。ここで3年間、潜伏、現在平家の森とばれている居城をもうけた。同じく資盛を探し、山伏姿に変装した行盛・有盛は辿り着いた硫黄島で資盛の痕跡と動向を知り得ることができ、

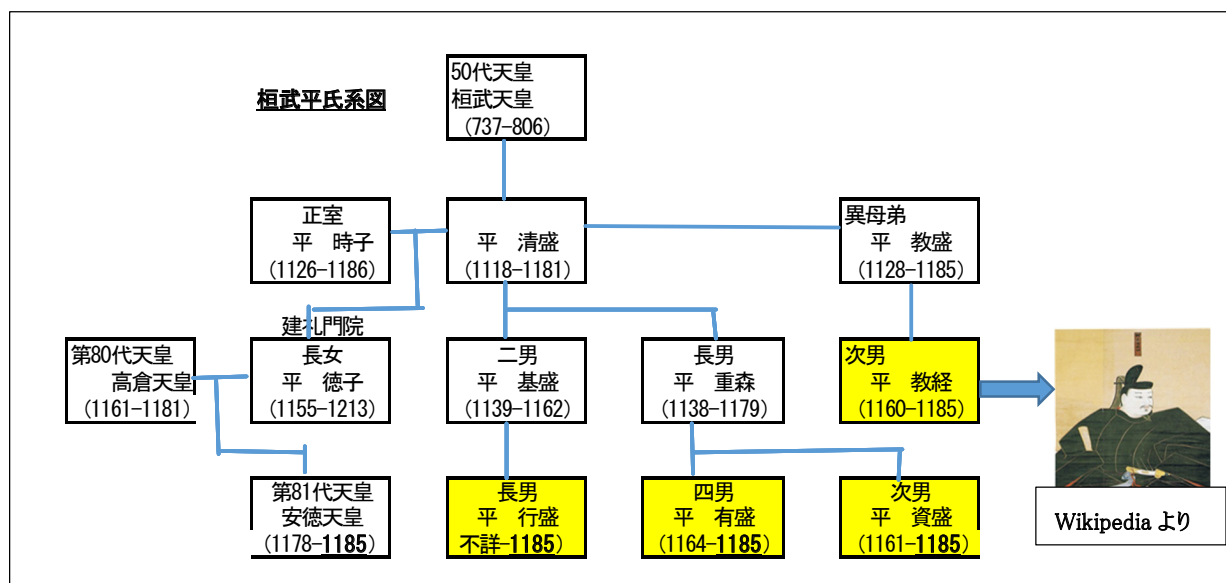


図3 平家系図修正版『保元物語』を参考に筆者作成

1205年（元久2年）に喜界島に行き、資盛と20年ぶりに再会した。

他方、安徳天皇と一緒にいたとされる教経は一端高知県にある場所に落ち着いたが、安徳天皇が逝去したので後を追うように硫黄島経由で喜界島にたどり着いた。喜界島で再会を果たした4名は、喜界島上陸後3年間源氏勢の追跡の気配がないことから、大島本島に移動する計画を成し大島本島の偵察を行った。偵察隊の報告を受けた4名は、本島上陸を決し、喜界島に40名ほどを滞留させ、三か所に分かれて28隻の船で、総勢684人で大島に攻め入った。まず、行盛は5艘の船で東裏に攻め込み、龍郷戸口に築城した。資盛の船7艘は島の最南端の加計呂麻島諸鈍と瀬戸内町あたりに攻め入り、諸鈍に城を構え、有盛は5艘で島の西北から侵入、名瀬大熊・浦上に築城した。教経は屋喜内村の阿室(アムロ)に駐屯した。屋喜内(焼内)間切は琉球国が16世紀に設置した地域名で、1917年に宇検村に改称した。教経は現在の宇検村から大和村あたりとそれぞれ地域を役割分担して支配していったようである<sup>5)</sup>。宇検村と言えば、恐らく近畿大学がマグロの養殖をしているあたりではないか、非常に静かな湾である。持ち込んだお宝(三種の神器?)もと書いているが、それらは教経が管理したようで、奄美大島で一番高い山である湯湾岳の奥深くの森林地帯に隠したとのこと。教経の末裔と称する宝村金喜玖翁と孫の宝村喜玖男両名は湯湾岳の八合目あたりにそれらしき物があったと伝えられているとの記載もある<sup>6)</sup>。湯湾岳は宇検村と大和村の間にあり、奄美大島の開祖といわれるシニレク、アマミコが降り立ったといわれる霊山である。かくして平家の落人達は、奄美大島各地に子孫を残し、文化的影響を与えた。大島に文字を伝えたのも彼らであるとのこと。

次に、琉球王国が成立した15世紀半ば以降、奄美大島群島の交易利権等を巡って、琉球王国と日本との衝突が起きていた。奄美南部の沖永良部島と与論島は既に琉球王国の支配下に入っており、1466年（文安3年）までには大島、喜界島など奄美群島全域が琉球王国の支配下に入った。琉球王の王命により1504年（永正1年）に奄美大島に渡り、名瀬間切首里大屋職となったのは笠利為春（1482-1542）である。間切（まぎり）とは、琉球王国時代の行政区分のひとつであり、現在の奄美市名瀬と龍郷町（東シナ海側）にあたる。大屋職とは代官所などの行政管理部門である。奄美大島初代笠利為春は琉球の第二尚氏初代尚円王（1415-1476）の父・尚稷（不詳-1434）の孫であると言われている。琉球の一部であった奄美大島を琉球から切り離したのは薩摩藩である。

1609年（慶長14年）、薩摩藩は、明との関係が強かった琉球王国を征伐するという決断に至った。まず、奄美大島に3000の兵で来島した。この頃、奄美大島の琉球王国派遣の統治者は、笠利家第5代笠利為転（1570-不詳）であった。奄美大島の首府は笠利町笠利にあり、薩摩の進軍に対し、奄美大島では特別な戦闘もなく、容易に歩を進めた薩摩藩は、次に徳之島に入った。この地では一部の者が抵抗したが、



速やかに制圧されたようだ。その後、薩摩の軍勢は琉球王国本島に攻め入った。琉球王国では、薩摩藩の琉球侵攻を迎え撃つも大敗北を喫した。

翌、1610年（慶長15年）、第二尚氏王統第7代目の国王の尚寧王（1564-1620）は、薩摩藩初代藩主島津忠恒（1576-1638）と共に江戸へ向かった。島津家の初代島津忠久（1179-1227）は、源平合戦後の1185年に、公家五摂家のひとつ近衛家領島津荘の下司職に任じられた。鎌倉幕府成立後には源頼朝（1147-1199）より薩摩国・大隅国・日向国の3国の他、初期には越前国守護にも任じられ、鎌倉幕府有力御家人の中でも異例の4ヶ国を有する守護職に任じられた。第18代島津忠恒（1576-1638）の時代に初代薩摩藩主となったものである。島津家は1602年の関ヶ原の戦いで父の島津義弘（1535-1619）が豊臣方に属したため、忠恒は徳川家康（1543-1616）に謝罪のため上洛、途上、駿府で家康に、江戸城にて徳川秀忠（1579-1632）に謁見した。忠恒は、家康から家久の名前と琉球の支配権を承認されたほか、奄美群島を割譲させ直轄地とした。そして、薩摩藩は琉球王国の第二尚氏を存続させながら、那覇に在番奉行所を置いて琉球王国を間接支配するようになった。そういう訳で、奄美大島は琉球の一部であったが、関ヶ原の戦い以降、薩摩藩の支配下に置かれたことが理解できた。しかし、三味線と琉球王国との関係、あるいは筆者の生家に琉球三味線が何故、あるのかの疑問はまだ続く。

## 2. 三味線のルーツと奄美民謡（島唄）

奄美の三味線と沖縄の三線は違うと思っていたがルーツは同じようである。三味線は、室町時代に中国の三絃が琉球へ渡来し、三線となり、それを日本の楽器として改良、発展させたものだそうだ。日本に正式に伝わったのは16世紀ごろと言われている。三線は日本の音楽に合わせた自由な改良がおこなわれ、約半世紀ほどで、旋律楽器でもあり打楽器の要素ももつ、日本固有の弦楽器三味線が生まれ、全国に広まったとのこと<sup>7)</sup>。特に、琉球王国時代の17世紀初頭には琉球王国が三線主取（サンシンヌシドゥイ）という役職を設け、この他、三味線に積極的であった。琉球王国は、清から訪れる冊封使の接遇のために典礼を定めて盛大な接待式典を挙行していた。そのための役職である踊奉行の玉城朝薫（1684-1734）が1719年（享保4年）、能や歌舞伎など日本の芸能を参考にした組踊を創始し、三線・島太鼓・胡弓といった沖縄音楽・琉球舞踊の発展の礎となった。日本の芸能が取り入れられた背景には、日本文化への造詣が深かった王国摂政・羽地朝秀（1617-1676）の影響があるとのこと。彼は、薩摩の重臣との親交を通して藩-王国間のコネクションを築き上げ、国家運営形態を作り上げた人物として紹介されている<sup>8)</sup>。

奄美大島や琉球王国の三味線に使用される蛇皮は中国との貿易でもたらされた。王国時代は貴族や士族といえども経済的には必ずしも恵まれず、高価な蛇皮を張った三味線は富裕さの象徴であったとされる。裕福な士族は一本の原木から二丁の三線を製作し“夫婦三線（ミートウサンシン）”と称したり、漆塗りの箱に納めて飾り三線と称し丁重に床の間に飾ったりする文化があったそうだ（Wikipedia）。筆者所有の三味線に添付された説明書（図2）では、6つの琉球三味線の型が示されていたが、インターネット上の説明<sup>9)</sup>を加えれば沖縄三線は棹の形状から以下の7種類の型（かた）に分類される。

- ・**南風原型（ふえーばらー）**：最も古い型であり、名工「南風原」の作と伝えられている。棹は細身で天（チラ）は曲がり少なく扁平。音階を調整する部分、高音域の音であっても澄んだ音がでるように工夫されている。
- ・**知念大工型（ちねんでーく）**：初代三線主取であった知念大工の作とされる。棹は太く、天の曲がりは大い。天は三味線の一番上の部分であり、天の部分と野丸の下部から鳩胸にかけて痩せ細った馬の背のように中央が盛り上がっているのが特徴である。
- ・**久場春殿型（くばはるとうぬ）**：久場春殿の作とされている。沖縄三線では最も大型である。
- ・**久葉の骨型（くばぬふーにー）**：久場春殿（クバシュンドゥン）の作と言われている。横から見るとクバの葉柄に似ていることから名付けられた。棹は最も細く、下方へ近づくにつれ太くなり、7型の中で最も小ぶりである。
- ・**真壁型（まかび）**：名工真壁里之子（マカビストゥヌシ）の作と言われる。均衡がとれた美しさから真壁型が最も多く製作され、かつ人気も高い。開鐘と呼ばれる三線は全てこの型。他の名工達と異なり、王国の官職にあった真壁の棹に対する情熱は相当なもので、完成した棹であっても納得のいかないも

のは薪として火にくべたという伝承がある。

- ・与那型（ゆなー）：真壁型と同時代の与那城の作とされている。琉球古典音楽の演奏家はこの型を好む傾向にあるようだ。

筆者の持つ三味線は、久葉の骨型（くばぬふーに一）と言い、雌雄一对で作られ、その雌三味線の方であるとのこと。それでは雄三味線はどこに？探し出すことができればめでたく雌雄一对になって夫婦三味線になるのであるが。琉球王は何百と三味線を造らせて、その中から5つの三味線を選んだ。その中の3棹は博物館に収納されて保管されているが、2棹は行方不明であるとのこと。

## ■ 奄美民謡から知り得た島民の苦悩

### 1. 薩摩藩が目付けた奄美大島のサトウキビ

そして、問題の一つ目はサトウキビである。奄美民謡の糸くり節の五節に以下のような内容がある。

心配じゃ 胸思じゃ、甘藷刈りや、心配じゃ  
甘藷ぬ高切りスラヤヌヤ罪札はきゅりよ  
トコヤヌスラヤヌバイドガジョーイジョーイ

甘藷とはサトウキビの事である。甘藷刈りやというのは成熟したサトウキビを刈り取ること、唱の意味は、心配で、心配で胸が苦しいよ。サトウキビを刈り取る時には、いかに注意深く刈り取らねばならないのか。サトウキビを決められた高さに切らないと罪札をはめられてしまうという意味の歌である。罪札とはいわゆる首枷であり、中国や韓国の歴史ドラマにも良く出る。罪人の首にはめて自由にふるまえないようにした刑具である（図4）。画像はどのような刑具かをイメージする為にWEB検索したものであるから、実際にはもう少し、板の幅が広く厚みがあったと考えられる。中央の円に首をはめ、サイドの円に両手を入れて拘束する。中国や韓国の歴史ドラマでは首枷の前方に鎖と手錠を加えた刑具等も登場する。サトウキビの刈り取り失敗が、首枷等の刑具につながるとは、サトウキビの高切がいかに重罪であったことか。それは単にサトウキビの刈り入れの時の失敗の罪である。サトウキビを刈るときに地面から何センチと決められていたらしくそれよりも高く刈ると罪人になってしまう。そのことが心配だ心配だーという歌である。栽培していても自身で食せられないサトウキビ、刈り方を間違えると罪人になってしまう島民の苦しみを謳ったものであり、島津藩の圧政がいかに島民を苦しめていたかという事である。

『明治維新のカギは奄美の砂糖にあり：薩摩藩隠された金脈』<sup>10)</sup>によれば、薩摩藩の奄美大島侵攻の目的はただ、奄美のサトウキビにあった。この後、薩摩藩は徹底した差別支配を行った。そして薩摩藩は奄美の砂糖によって大きな蓄財ができ、経済的に潤ったが、島民はその陰で泣いた。奄美大島に流罪となった西郷隆盛（1828-1877）初めてその事実を知った。「甘藷の刈り株が高ければ首に罪人札をかけて村中



図4 首枷画像（web 検索）

引き回され、指先で砂糖をなめた為に鞭うたれ、製造が粗悪だとの理由で首枷、足枷の憂き目に遭い、たとえ、一斤でも他に売却すれば死刑に処せられた。』<sup>11)</sup> 大島での流人生活の中で、その事実を知った西郷は、島民を苦悩から解放すべく薩摩藩に対し、帰郷後に進言書を提出した。

『大奄美史』<sup>12)</sup>によれば奄美大島における甘藷（さとうきび）の栽培は1610年（慶長15年）、直川智（すなおかわち）なる人物によって大和村磯平という場所で試験的に始められたという。彼は琉球に赴く際に嵐にあい、支那（現在の中国）に漂着した。農夫として働くうちに甘藷の栽培と精糖法について学んだ。数年後、琉球に行く貿易船で帰郷する際に、荷物の底を二重にして土と甘藷を入れて持ち帰った。帰郷後、甘藷の栽培を試み、成功したとされる。製糖が盛んになった1698年（元禄11年）、第三代薩摩藩主島津綱貴（1650-1704）は、甘藷の栽培を監督奨励し、1745年（延享2年）、第五代薩摩藩主島津綱豊（1702-1760）は薩摩への租税として全て砂糖をもって当てようとした。薩摩藩の統治下も奄美の領域支配に深く関与し続けた。1726年（享保11年）に藩政への貢献（砂糖増産のための新田開発）を主な理由として、笠利家第12代笠利佐文仁為辰（1678-1784）が、奄美で初めて代々外城衆中格（後の郷士格）に取り立てられ、薩摩藩主より“田畑”姓を与えられた。笠利氏から田畑氏への強引な変更も名誉と捉えるべきかどうか。佐文仁はこれまで牛馬が主力の精糖を水車に改良し、精糖増産につなげた。しかし、水車は水力を使う事から一定の地域に限られたようだ。

次に、田畑から龍に改名させられたのは、17代当主の田畑為勝佐文仁（1778-1852）の時代1785年（天明5年）である。筆者の生家にも配又平（通称ナーダ）という山野のすそ野に大きな水車があった。木製のといから山水が流れて来て水車の箱形状のところに一定量水が溜まると水車が回りだす仕掛けである。水車の中央下から左手にサトウキビを絞る鉄の三輪と連結され、サトウキビをかませるとキビのしほり汁が流れ落ちて来て集積される。筆者の子ども時代にサトウキビを歯車に噛ませて喜んだ経験がある。次の工程として鉄製の大きな四角（縦約1.5m横2.5mほど）のなべ？に入り、火を焚いて練りまわし（何か白い粉末を混ぜたような気がする）、適度なところで更に鉄製の大きな鍋に入れて力強くかき混ぜるとねっとりした砂糖ができる。それを固まらないうちにタルや小さな四角の箱型に入れて固まらせる。その工程の至るところに精度と品質とうま味が分かれてくる。筆者らは固まらない前の水飴状の時にねだって少々分けてもらい食べるのが好きであった。奄美大島の一体、何か所にこうした水車式の精糖工場があったのか？電気が奄美大島の各家に配備されたのは1950年代半ばころであったと思うが、その頃より、精糖工場も電力による工場ができ、我が家の水車式の精糖工場は御用済みとなった。

## 2. 奄美大島における“家人（ヤンチュ）制度”

次は家人（ヤンチュ）問題である。奄美大島には、“ヤンチュ”と呼ばれる債務奴隷的な身分が存在した。“家人（やんちゅ）制度”は、奄美が琉球時代から官尊民卑の階級意識がかなり高かったことも影響されているが、薩摩藩政時代のヤンチュの大量発生は、奄美の植民地的な黒糖専売制が原因である。台風などによる不作で規定の上納ができない農民は、自らの体を豪農に売ってヤンチュになったそうである。ヤンチュ制度は薩摩藩の特異な農奴制であり、砂糖を増産して藩の財政を立て直すには、個別の百姓の尻を叩くよりは転落した農民を豪農に吸収させて、大規模農業による増収を期待した方が得策と考えたようである。『大奄美史』によれば、家人（ヤンチュ）制度の場合には借金が肩代わりできれば解放されることもあったが、“膝素立（ひざすだち）”と呼ばれるヤンチュは、ヤンチュ間で生まれた子のことを言い、セダと呼ばれる特殊なヤンチュである。ヤンチュの女性が主家で生んだ子供や私生児などは、終生ヤンチュとして暮らしたようである。主家としては、終生自分のヤンチュとして貴重な労働力にできるので、ヤンチュ同士の出産を奨励したとのこと。“家人（ヤンチュ）制度は”現在廃止されたが、奄美大島におけるこのヤンチュ問題は、源をただせば、薩摩藩の圧政に苦しむ島民の存在である。“くるだんど節”の元唱の歌詞は以下のようなものである。

くるだんどー 仲勝ごっちぬ くるだんどー  
 ゆるくびちゃー 栄多喜主や ゆるくびちゃー（喜ぶ）  
 泣きまえちゃー 宮松あごくわや 泣きまえちゃー（泣く）



この歌も最近奄美民謡を習い始めて知ったのであるが、相当に島民の辛さがにじみ出る。ゆるくびぢゃの意味は喜ぶであり、雨曇りがしたぞ、仲勝ごっち（ごっちは耕作地のこと）の空に雨曇りしたぞ、地主の栄多喜翁は待望の雨が降って水車式砂糖工場が動いて砂糖の生産ができるから大喜びだが、ヤンチュ（農奴）の宮松あごはこき使われるので悲劇だーというのである。砂糖車というのは先述した水車式の精糖工場の事である。“くるだんど節”は奄美では有名な島唄であり、地域ごとに替え歌の様になっているそう。武下かおり先生からも歌の意味の説明があったが、改めてその内容をインターネットで調べてみた。この島唄が造られた年代・作者は不明である。場所が名瀬市大熊あたりということ、大熊の左手の山の頂上から右側が大熊、そして左側が有良であり、その左手の山すそに生家の水車小屋（精糖工場）があった。登場する栄多喜翁と生家との関係は明らかではない。しかし、生家は栄原であるが、1945年（昭和20年）に栄原に改姓するまでは、栄の一字であった。そして、歌に登場する家人（ヤンチュ）の存在が一致する項目である。解説は、文栄吉（1890-1957）が出版した『奄美民謡大観』に根拠を得たようである。とにかく、奄美の民謡には悲恋者や悲哀のこもった歌が多く、三味線の音色と島唄を聞くと涙が出そうになる。

こうした奴隷状態の者は世界中に存在した。戦争で負けた国の者達は戦勝国の奴隷として働かされた。そして、植民地政策である。時の流れの中で、そうした奴隷状態の者を解放せよとの運動が始まった。奴隷解放運動は、イギリスでも展開されていた。フローレンス・ナイチンゲール（Florence Nightingale 1820-1910）の母方の祖父ウィリアム・スミス（Smith William 1756-1835）は、政治家としてあるいは、奴隷解放主義者としても知られている。イギリスにおける奴隷解放運動はアメリカのハリエット・ビッチャー・ストウ（Harriet 《Elizabeth》 Beecher Stowe 1811-1896）達の運動として展開された。1861年にアメリカで起きた内戦は奴隷解放運動をスローガンにした南北の対立であり、南北戦争と呼ばれた。北軍のリーダーは後に、アメリカ第6代大統領になったエイブラハム・リンカーン（Abraham Lincoln 1809-1865）である。奴隷問題を焦点とする南北対立の中で、南部十一州が連邦を脱退して、アメリカ南部連合を結成し、連邦側はそれを阻止し、連邦を守ろうとしたもので南北戦争とよばれた<sup>13)</sup>。ナイチンゲールも著作『看護師と見習い生への書簡』<sup>14)</sup>の中で、ストウ夫人との文通の事実を述べ、ユーナの運動を展開しましょうと見習い生達に投げかけている。西郷は、サトウキビ問題と同じく、ヤンチュ問題を遺憾に思い、現地の役人に依頼したり、龍家の者にも依頼したりしてヤンチュの待遇改善に努めた<sup>15)</sup>。

この後、明治維新を迎えた日本では、維新政府が1972年（明治5年）に“人身売買ヲ禁シ諸奉公人年限ヲ定メ芸娼妓ヲ開放シ之ニ付テノ貸借訴訟ハ取上ケスノ件”と言う太政官勅令を発令して人身売買を禁じた。南の果てにある奄美大島にも通達がなされたのか、歌にもあるヤンチュ制度は廃止された。ちなみに、祖父が家督を継いだころには我が家にも5人のヤンチュがいたが、祖父が家長になった時点で、全員自立できるように土地を分けて解放したと祖父から聞かされた。しかし、ヤンチュ解放に関して、所に依っては騒動も起きたようである<sup>16)</sup>。維新政府のヤンチュ問題改革には人権派の西郷が関与したのではないかと考えられる。

## ■ 奄美大島のケンムン（妖怪）話と奄美の貧困

### 1. ケンムン（妖怪）の実態を証言する祖父栄原坂太郎

今や、幼い子供でも信じないのがケンムン（妖怪）話である。筆者も祖父からケンムン（妖怪）の話は聞いていたが、半信半疑であったことを思い出す。本論の歴史探訪からは若干逸れるが奄美のケンムン（妖怪）話にちなんで筆者の祖父、栄原坂太郎（1880-1968）について論じておきたい。

『奄美大島物語』には奄美カッパ「ケンムン」譚（はなし）が出てくる。著者の文（かざり）英吉（1890-1957）は奄美民俗研究家であり、大島朝日新聞編集長経験者であるからジャーナリストでもある。文は奄美大島三方村大熊（現在の奄美市名瀬大熊）の生まれ。大熊は生家有良の山一つ越えた隣村の地域である。その調査の過程で得られた多くの証言を素材として奄美のケンムン話を書いている。その中で、「ケンムンの実態をはっきり見た」<sup>17)</sup>と証言しているのは恥ずかしいかな、わが祖父坂太郎である。一つ目の証言は村会議員栄坂太郎、二つ目は灯台守 栄坂太郎とある。祖父坂太郎は45年間無償の村会議員

であった。村会議員時代の名称でもわかるように現在の奄美市はかつて名瀬市であり、その前は三方村である。三方村は古見方、上方、下方、市街地の4地区に大別されてその上方地区に大熊・浦上・有屋・仲勝・有良・芦花部の6集落がはいり、先述した有盛支配地域である。

最初に見た場所は村はずれの精糖工場での出来事である。ここで述べる精糖工場とは先述した水車式の精糖工場である。祖父はまことしやかにカッパの妖怪について証言したが、良く考えてみると冷たい水の中で足がつって溺れ死ぬということはある。それがカッパの正体なのではないかと私は考えた。生家の前にある大きなガジュマルの木の枝に板を置いて陣地にしたり、道路わきを流れる川でエビやカニを捕まえたり、子ども同士で川沿いに遊びながら上流へと移動する。その川を遊びながら、上流に向かって移動すると10分ほどで川は急に左に折れる。その左に曲がったところのすぐ右側が水車小屋のある配又平である。途中には川底が見えないほど深いところもある。両親からきつく戒められていたのは川底の深いところにはカッパが住んでいて、足を引っ張るから深いところには絶対行ってはならないという注意であった。その言葉は忠実に守ってきた。だから、自然の中にあつて怪我一つしないで今まで生き延びてきたのであろうか。本当に顧みれば筆者は山野や原野を自由に動き回る、いうなれば、自然児を越えて天然の野生児であった。

奄美の自然と言えば、先ごろ、BEGINの『島チュの宝』という歌の歌詞に、汚れて行くサンゴや、減っていく魚という内容がある。奄美大島はサンゴ礁の上に立っている島である。引き潮になると有良の湾の入り口に岩礁が浮き上がり、人が歩ける。そこに行きつくには湾の左手にある岩場を通り、ダンテの地獄の門のようながっばりと口を開いた場所、打ち付ける波が吹きあがり、そしてサーっと引いていく、そこに落ちたら一生上がれない。死の入り口に落ちないように移動すると、幅は2mくらいで湾の端から端まで赤ちゃけた岩礁に導かれる。天然の野生児である筆者は、サザエ漁に夢中になる。岩礁とほぼ同じ色のサザエを発見した時の喜びはひとしおである。夢中になって探しているといつしか足元に海水がひたひた、その時点で打ち切って海岸に戻らないといけな。せき止められた海中の藻に絡みついているウニを海辺で割って塩水で洗って食べる。残りはビンに入れて自宅に持ち帰る。浅くなった広々とした海岸で見つける小さな貝たちは、幼い私たちの格好の獲物であった。今は、どうだろう。子供たちはそうした磯漁ができるのであろうか？

次に祖父が「物凄いケンムンの足跡」<sup>18)</sup>を見たのは灯台守をしていた時であり、1952年（昭和27年）の事であるとのこと、場所は梵論瀬崎（ほろせざき）灯台（図5）である。

この灯台は1912年（大正元年）に初めて設置され、名瀬港への入港の指針にされている。恐らく、祖父は灯台が最初に設置された1912年（大正元年）から1952年（昭和27年）までの40年という長い間、この旧式灯台の灯台守として、朝は灯台の灯を消しに行き、夕方は点灯しに行くという毎日続けたものと考えられる。大変な苦労があったろう。自宅の前の川を渡って山沿いに灯台までジグザグな山道を登る。あるいは前稿で紹介した厳島神社の裏山の尾根沿いに登るしかない。真に忍と根気強さが求められる正に労役である。その灯台がGHQ統制時代の1952年（昭和27年）に、電灯点灯への改修工事の際の出来事とし“ケンムン見たよ”の証言をしている。この時の改修工事の時、村人だけの協力であり、祖父の名前が灯台に銘記されていた。その後、又、専門的に改修工事がなされたことは知っているが、祖父の銘記が消されたことは悲しい思い出である。ずっとずっと村会議員の頃からの祖父の無償労役はこれ以降、終了した。現在は、海上保安庁が保守点検している。この灯台の右下は、先述した湾の左側にあたるが、その岬には野生の山羊が飛び跳ねているのを目撃していたが、現在は一匹も目撃されない。



図5 梵論瀬崎（ほろせざき）灯台



## 2. 奄美はなぜ貧困なのか ― 祖父の試み

奄美がなぜ貧困なのか？は祖父の課題であったようだ。ここまで検証した私の結論は薩摩藩の圧政の影響が色濃く残っていたと考えるのであるが。祖父は、多産のせいであると考えたようだ。ケンムン話の第一の証言者の時の祖父は村会議員であった。それは奄美市が三方村の時代であったころのことである。三方村から名瀬市に代わり、その名瀬市時代も一時期は、市議会議員であり、地元の長老的存在であった。戦時中の市議会で産児制限を唱える等ひんしゅくを買ったこともあったようだ。日本が産めよ・増やせよ政策の時代である。奄美大島でも多産であり、それが貧困の根源と考えたのであろうか？我が家も父方の兄弟8名、母方の兄弟8名と叔父叔母が多数、そして従妹と呼ばれる者は50名以上であり、顔も名前もろくろく覚えられない。

その次に、これからの奄美の経済復興に必要なのは大島紬と考えたのか。祖父は、地元の若者、平田国隆（1904-1973）が15歳の時、1918年（大正7年）頃であったろうか、大島紬の製造法修得の為に、竜郷村秋名に行かせた。修行後に有良に戻り、平田絹織物工場を創業した。生前、祖父に足を向けては寝られないと言っていた平田氏は、紬工場の成功後に名瀬市内に拠点を移し、現在は、平田絹織物株式会社になっている。1994年（平成6年）から名瀬市長であった平田隆義氏（1937- ）の父君である。隆義氏によると修行先は竜郷村秋名であり、戦後に奄美大島選出の国会議員伊東隆治（1898-1968）の父親のところであったとか。伊東隆治（1898-1968）氏は、GHQ 統制時代の終了後の1952年（昭和27年）に衆議院議員に当選した。彼は、奄美に里帰りをする時に自身の生家に戻る前に必ず、我が家を訪れ、正座して祖父に深々と頭を下げていた。義理深い人だと祖父は語っていた。奄美の貧困問題解決、そして経済興隆の為に奄美から国会議員をと祖父は考えたのであろうか？かなり、熱心に支援をしたようだ。ちなみに奄美大島で初めて国会議員になったのは基 俊良（1826-1904）という方で1890年（明治23年）第1回衆議院議員総選挙に当選した。島唄の“俊良主節”は、彼の新妻が海でおぼれてなくなったことを嘆いた歌である。

ハレーイ 泣くな ヨーイ なげくな 金久ぬ ヨーイ  
ハレ 俊良主 ヨイヤーレイ ハレー とうじぬ（妻） イヨーイヌ  
みのかなや 運命 あていぼう ヨーイ  
にぎやうしゅや（塩水） みしょちゃる（飲む） ヤーレイ

この唄は実に切なく悲しい。聴くだけなら実に切なく心にしみるが、実際、歌うとなると難しい。一時期大島紬は結城紬と並んでその品質について賞賛を与えられたものだ。着物を着る人が少なくなった現在、大島紬も低迷、飽食時代にあって、砂糖の消費も減ってきている。が、大島紬も黒砂糖も大切な奄美大島の特産物である。特に大島紬の絹ずれの音、しゃっきとした着崩れしない着物は筆者も大好きである。着物の上に黒いマントとステッキ、白髪に帽子のいでたちの祖父は紳士のようで品があった。これも余談であるが薩摩藩は、奄美での造船は認めていなかったようだが、祖父は造船技術があり、5人乗りくらいの小船を造っていた。その小舟は隣の芦花部という地域から刈り入れた稲を海路で有良まで運ぶ役割を果たした。我が家は芦花部でも稲作を行っていたからでる。毎年、名瀬港で船漕ぎ競争が行われるが、そうした船と同じくらいのサイズである。注文があると他の人の船も作っていた。この作業をしている時は、浴衣の後裾を腰ひもに入れ、恥ずかしげもなく、ふんどしが見えるほどにめくりあげる。その両いでたちのギャップは大きい。しかし、筆者の質問に良く答えてくれるのは祖父であり、良く書き物をしていた。その家も170年もの時を経て、2019年（令和元年）の台風でついに傾いてしまったので解体し



図6 生家の桃の花

た。今、迎えてくれるのは桃の花（図6）と高倉（奄美特有の倉庫）のみである。

そして、我が家には青い目をした珍客も訪れた。GHQの方々のようである。戦後育ちの筆者について良く家族や親せきの者が言っていたのは、戦後の栄養不足のせい、弟がすぐできたからなのか、母の母乳が出なくて、乳児の私は今にも息絶えそうであったとのこと、そうして起き上がれないで横たわっている時でも、六唱という奄美の踊り歌を歌うと、か弱い両手を挙げて手をまわしていたとか、この栄養失調状態の私を救ったのはGHQのミルクであった。その時の貨幣価値はわからないが、この時代はB円の時代である。そうとう高かったらしいが祖父の力で得ることができたらしい。祖父は私の命の恩人である。風邪一つひかない現在の私を見たら想像つかないであろう。そのGHQの青い目の面々が家を訪れた時は、白米でもてなしたようだ。私たちは芋ごはんを食していた。筆者が、2.3歳ごろであったと思うが“しちやりしちやりしたご飯が食べたい！”と駄々をこねたと周囲の者がいう。しちやりしちやりしたご飯というのは幼児期の私なりの表現ではあるが、芋を混ぜない白米のおいしいご飯の事である。何反もの米を作っても、配るところが多く、直ぐに食べつくしてしまうのであろうか。ともかく、貧困は我が家のみならず、奄美大島全所帯の問題であり、日本全体であったことは後に知ることである。大正時代に引き起こされた世界大恐慌、そして第一次世界大戦、そして第二次世界大戦は日本国土を廃墟にしたのだ。

## ■ おわりに

こうして筆者の奄美大島の大方の方は知り得た事実であろうが、私には初めて知った奄美大島の歴史的な事実であった。三味線の事から奄美大島の琉球統治時代と、そして薩摩藩統治時代への転換がサトウキビとヤンチュ問題を大きくした。執筆しながら懺悔のような気持ちになったのはなぜか？願わくば統制する側ではないことを祈りたい気持ちになる。併せて、生家の問題にも若干触れつつ、筆者の子供時代を回顧する機会にもなった。本当に顧みれば筆者は自然児を越えて天然の野生児であったと思う。

続けて、奄美大島に伝わるケンムン（妖怪）話に証言をした祖父の村会議員という役割と灯台守という役割から、有良の生家の、特に祖父坂太郎については、これまでの奄美大島歴史検証では、ほとんどその業績は見当たらなかったもので、一筆したためておいた。それも姉ヒデヨ（三女）の“1952年改修時の灯台には栄原坂太郎の銘記がなされていたのに現在の灯台にはその銘記がないのが悲しい”との一言が心に潜んでいたからである。それ故に私事である坂太郎の事を一部論述したことをお許し願いたい。

そして、ここまでの調査で、父方、栄家については、祖父の三代前（江戸時代末期）およそ100年前まではわかったが、その前はわからない。万が一、くるだんど節に登場する栄多喜翁がその前の世代であったとしてもその後の家系図らしきものが見つからないために点と線はつながらない。いずれにしても、栄多喜翁が現存する者であったとしたら、田畑為辰（佐分仁）が牛馬による精糖法から水車式精糖法に改革した頃であろうから約300年くらい前であり、探索活動は容易ではない。

そして、母方のルーツについてである。家系図作成に余念のない同じく姉の依頼で動いたものである。母の母、つまり、母方の祖母の名前は芋千代であるという。姉の戸籍調べでは、芋千代の戸籍は奄美市役所ではなく、戸籍係から龍郷町役場に行けと言われたとか。ほとんど海路で鹿児島から行く姉には龍郷町役場へ行くのは面倒だったのか。常に空路を使用する私の場合、龍郷町役場は空港への途中になる。姉の依頼もしばらく放置していたが、やっと重い腰を上げて龍郷町役場へ。しかし、役場では芋千代だけでは戸籍の申請はできないので、姓を確認するようにと、うっかりした。私としたことが何という失態。姉に電話をしてもつながらない。それでもう一度奄美市役所に行き、母親の戸籍から祖母の名前を確認した。名前は龍芋千代、芋千代の父は佐徳、母は赤場、戸主は龍茂太郎で叔父佐徳の妻赤場、そしてその娘芋千代として入籍している。茂太郎の父は前戸主の佐宣、母はアグリ、いずれかの兄弟が芋千代の父親の佐徳という事になるのか。登場した全員の姓が龍であるから分らない。どんな家族形態なのか、姻戚結婚ありか？点と線はまだつながらない。今後、民族資料館などを検索しないとその先は見えてこない。しかし、次兄が母方の祖母は龍家の生まれであると言っていたのは事実であった。

現在、奄美大島に関する歴史と我が家について夢中で紐解いている段階であるが、折角、その契機になっ

た三味線を弾くという課題と島唄をじっくりと歌えるようになりたい筆者の希望は前途多難である。やはり、島唄はむづかしい！ イッツ、ソ、ディフィカルト！！である。

### 引用文献

- 1) Florence Nightingale (1888): To the nurses and probationers trained under the "Nightingale Fund", (湯楨ます他訳；ナイチンゲール著作集第三巻，看護師と見習い生への書簡，p.176，現代社，1985年.)
- 2) 昇曙夢著：奄美史，南方新社，1949年.
- 3) 佐々木秀美著：平家落人と源為朝伝説の島－奄美大島歴史深訪 (1)，看護学統合研究24-1，pp.47-55，2022年.
- 4) <http://rca.open.ed.jp>
- 5) 文栄吉著：奄美大島物語，文栄吉著：奄美大島物語，pp.80-96，南方新社，2008年.
- 6) 文栄吉著：前掲書 5)，p.84.
- 7) <https://www.okoto.jp> > information > shamisen\_history
- 8) <https://okinawa34.jp/sanshin/history>
- 9) <https://okinawa34.jp/sanshin/type>
- 10) 大江修三著：明治維新のカギは奄美の砂糖にあり，薩摩藩隠された金脈，アスキー・メディアワークス，2010年.
- 11) 昇曙夢著：西郷隆盛獄中記－奄美大島と大西郷，新人物往来社，1977年.
- 12) 昇曙夢著：前掲書 2)
- 13) 齊藤真他：アメリカを知る辞典，p.334，平凡社，1986年.
- 14) Florence Nightingale (1888): To the nurses and probationers trained under the "Nightingale Fund", (湯楨ます他訳；ナイチンゲール著作集第三巻，看護婦と見習い生への書簡，p.281，現代社，1985年.)
- 15) 昇曙夢著：前掲書 2)，p.69.
- 16) 昇曙夢著：前掲書 2)，pp.451-455.
- 17) 文栄吉著：前掲書 5)，p.287.
- 18) 文栄吉著：前掲書 5)，p.299.

### 参考文献

- 1) 外間守善著：沖縄の歴史と文化，中公新書，2019年.
- 2) 笠利水也著：奄美史の一断面 奄美笠利氏の系譜，千秋社，1978年.
- 3) 麓純雄著：奄美の歴史入門，南方新社，2013年.
- 4) 田畑千秋著：奄美の暮らしと儀礼，第一書房，1992年.
- 5) 田畑千秋著：奄美・沖縄女のことわざ，第一書房，1997年.
- 6) 高倉倉吉著：琉球の時代，ちくま学芸文庫，2012年.